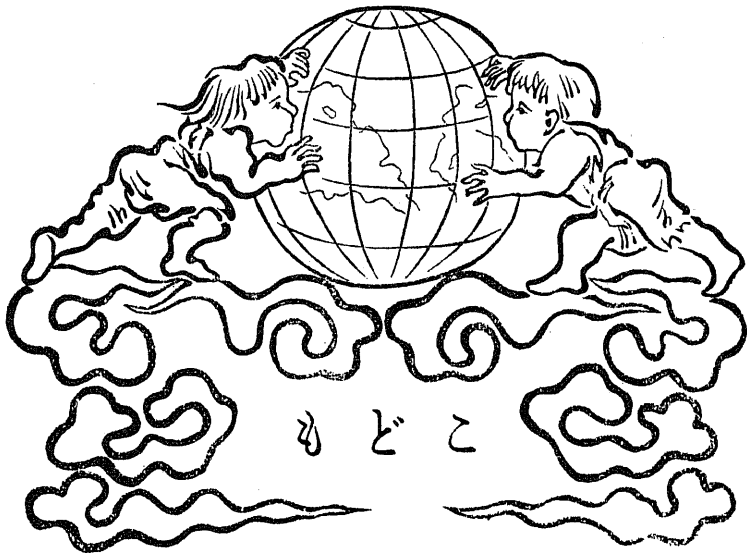


もど子と人婦

號五第卷叅第



百合姫

やまとの翁

むかし、ある處に、年
 とった樵夫が住んで居りま
 したが、夫婦の中に、今年
 三歳になる一人の娘の百合
 姫といふのがあるきりで、
 身代といったら、一文なし
 ですから、これから後、ど
 うして、此娘を育て、いつ

たものだろーかと、毎日く夫ばかり心配して居ました。

さて、ある日の朝、この樵夫が、やはり其事を苦にして、心

配しながら、山へ行つて、木を伐つて居ますと、不思議に、あ

たりが森としてきて、何ともいへぬ、いゝ香がして來たので、

はて不思議と思つて、木を伐る手をやめて、そこいらを見ま

わしますと、自分の目の前に、夫はく奇麗な、背の高い、一

人のお姫様が、立つて居ます。身體中、金の衣服で、まばゆい

位だのに、額の所の冠は、星の様に、ピカ―リピカ―リ光つ

て居ます。あんまり、見事なもんだから、樵夫はただもー、

あきれたまゝで、ほんやりと、立つて見て居ますと、其お姫さま

のいひますには

『我は子どもの守り神なり、汝常に正直なれども、貧乏にして娘を育つることできず、依つて、今日より汝の娘は、我が子として養ひ取らせんほどに、もはや、心配するには、及ばぬぞよ』樵夫は夫をきいて、たゞも、ありがたさに、胸が一杯になつて、急いで、家に歸て、百合姫をつれてきて、神様にお渡しもしました。

すると、神様は、すぐと、百合姫をつれて、遠い「幸福の國」へ行かれました。その「幸福の國」では、も、嬉しい、面白い事ばかりなので、百合姫も、こゝへ來てからは、以前とちがつて、毎日くおいしい物ばかりたべて、着物といったら、丸で金ばかりで光つて居るし、友達はいゝ子供ばかりで、みんなお仲



よしばかりですから、意地悪だの、けんくわなどする者は、一人もありません。

こんな具合で、こゝへ来てから、も一十一年もたちましたから、百合姫は、今年十四になりました。で、ある日のこと、守り神様が、百合姫を、お傍へおよびになりました、仰せられますには

「オー、可愛の子や、我は之から、暫らくの間、留主にならん程に、お前は、他の子供と一所に、音なく留主居をしや、其代り、こゝに在る十三の鍵は、幸福の國の十三の門の鍵なれば、之をお前に預けて行く、一番より十二番までの門は、之で明けて、其中の寶物を拜んでも宜しいが第十三番目の門を明けるこ

とは決してならぬ若し明けたら、屹度罰が當るからよくく氣を付けて、言ひ付けに背いてはならぬぞや』

と、仰せられて、十三の鍵を、百合姫の手にお渡しになりました。百合姫も、決して言ひ付けに、背きませぬといふことを約束しましたから、神様は、すぐと、どこかへ、おでかけになりました。

そこで、百合姫は、其鍵を持って歩いて、毎日く一ツづつ、門を明けて見ますと、どの門の中にもみんな、大變に立派な神様が居て、ぐるりが、まるでピカくと光って、其立派なことゝいったらとても、口では言はれぬ程なので、百合姫も、ついて來た他の子供らも、たゞも、あきれるやら、喜ぶや

らで 夢中に騒いで居ります。

所が、十二の門は、もーすっかり 開けてしまつて、とーく
第十三番目の門まで來ました。これは、「開けてはならぬ」と言
はれた門なのです。併し十二の門が、あれ程立派であつて見る
と、この門の中は、どれ程、うつくしいか知らん、と、思ふと、
もー見たくなつて 見たくなつて 堪らない。そこで、百合
姫は、そーつと、他の子供に『わたし、みんな開けてしまわな
くつてよ、たゞ、ちよいと、のぞける程明けて見よーと思ふの』
といひますと、他の子供等は 皆、頭をふつて、『そりゃいけな
いわ 神様があれ程、言つて居らしたのだもの！ 屹度、罰
があたるから、およしなさいな』といつて、中々承知しません。

ですから、百合姫も、其場では、其儘黙つて仕舞ひましたが、
心の中では、もゝ明けて見たくて、明けて見たくて堪らないの
です。

夫で、或日のこと、他の子供らは、みんな、どこかへ遊びに
行つた留主の時、百合姫は、たゞ一人でしたから、『さゝ、此時
だわ、今誰も居ないのだから、今の中に、一寸、のぞいて見よ
ーや、見て居る者がないから、誰も知りやしないだらうー』と、
獨りで、考へて、預つて居た十三番目の鍵を出して、錠前に入
れて、そーつと廻はしました所が、二つの扉が、一度に兩方
へ、パツと、明きました。

すると、其中には、立派な、立派な神様が、三人并んで、高

い臺の上に　チャンと立って居らっしゃる、其周圍が、一面に金の御光で、一目見て、眼が眩み相な程、光り輝いて居ります。で百合姫は、吃驚したとも　吃驚したとも、暫らくは、物も言ふことが、出来ないで、たゞ黙って其儘立って居りました、が、あんまり、御光の光が、見事なものですから、手を出して、指で、ちよいと、觸って見た所が、其指が、すぐと金色になってしまひました。さし、大變だと思つて、百合姫は　急に怖くなつて、忙いで門を閉めて、自分の室へ逃げて歸つて來ましたが、も一胸ははりさける程に動氣が打つて　顔色は赤くなつたり、青くなつたりして、とても、じつとしては居れません。夫に、金色になつた指は、どの位骨折つて、洗つても　磨つても、其

金が取れませんか、今にも、神様が、お歸りになつたら、どうなる事だらうと思つて、百合姫は、もー心配で、心配で堪りません。

其處へ、間もなく守り神様が、お歸りになつて、百合姫を呼びひになつて、先日預けた鍵を返せと仰せられましたので、百合姫は、前へ出て、態と、何も知らない風をして『お歸んなさいまし』といつて、其鍵をお渡ししました。すると、守り神様は、黙つて、百合姫の顔を見て居らしたたが、やがて姫に向つて『お前、あの十三番目の門を明けたのね!』と聞かれまして、た。姫は、ハッと胸に應へましたが、そしらぬ顔をして、『イーエーと答へました。神様は、黙つて手をお伸ばしになつて、姫

の胸を抑へて御覽になりますと、烈しい動氣で、一面に波打つて居る様ですから、これは屹度見たに違ないなとお考になつたもんですから、又尋ねました『お前あの十三番目の門を明けたのね!?すると、姫は又、知らぬ風をして『イーエ』といひました。神様は、はて強情な娘だなと思し召されたが、今度は百合姫の指を御覽になりましたので、『お前、隠しても、黙目だよ、屹度十三番目の門を明けたのでしょー!?と三度目尋ねられましたが、三度目ながら、姫は『イーエ』と答へました。

さすがに勘忍強い守り神様も、百合姫の強情には呆れました、『お前は、私の言付を脊いて、私の誠を犯した、もー今日からは、こゝに居て、善い子供の中に置くことは出来ません、これ

から、何所へなりと勝手に行くがよい』と仰せられました。
 其中に、百合姫はうとくと眠くなって来て、暫くは何も知
 らないで、グーっと寝入って仕舞ひましたが、大分久しく経
 てから、ひよいと目を醒すと、悲しや、今迄の美しい室だの庭
 だのは、丸で消えて仕舞って、寂しい寂しい荒野の真中に、た
 った一人悄然と起き上った所なんでした。(つゞく)

